

うみ

湖と生きる

時代小説作家としてデビューした

今村 翔吾さん

聞き手・植田 耕司
写真・長井 泰彦

江戸を舞台に火消しの群像を書き続ける



最近、とみに時代小説・歴史小説が人気を呼んでいると聞き、普段、行きつけの書店をいくつかのぞいてみた。すると、文庫本コーナーの横に「時代小説コーナー」がそれもありなり広いスペースを取って設けられているのに気付いた。しかも、大御所ともいえるベテラン作家から最近、売り出しの若手まで百花繚乱の状況だった。歴史・時代ものはこれまで、熟年の男性が読者層の主流だったが、最近では若年層、しかも女性のファンがめつきり増えているという。その時代小説の世界にさっそうとデビューしたのが滋賀県在住の今村翔吾さん(33)だ。文庫本が書店に並び出してちょうど1年という新人作家。横顔で紹介するように異色の顔を持ち、「人間の生き様を江戸期という世界を借りて自在に書き続けたい」と話す今村さんに話を聞いた。

いまむら しょうご

- 1984年、京都府木津川市生まれ、草津市在住
- ダンスインストラクター、作曲家を経て執筆活動に
- 2018年1月、守山市埋蔵文化財センター調査員を退職、作家活動に専念
- 2016年、「蹴れ、彦五郎」で第19回伊豆文学賞の小説・随筆・紀行文部門最優秀賞
- 「狐の城」で九州さが大衆文学賞大賞・笹沢左保賞受賞
- 2017年、「火喰鳥」(祥伝社文庫)で全国デビュー

— ダンスインストラクターから作家にというのは、とてもユニークな転身ですね。

「実は、教育評論家として活動している父今村克彦はダンスを通して非登校の生徒だけではありませんが、若い人の心を癒やす活動をしていました。僕も創作ダンスを志していたので学校を卒業後、父が主宰する創作ダンス集団『関西京都今村組』を手伝い始めたのです。地元山城地域や京都を



中心に活動していたのですが、滋賀でも（ダンスの）指導をして欲しいと声がかかり、今村組のダンス教室を開設するために僕が先陣をきって彦根市に移ってきたのが、滋賀と触れ合うことになったきっかけです。2009年のことです。その後、八日市（東近江市）、近江八幡、草津と教室を開く度に家を探し、引っ越しを繰り返して、今ではすっかり滋賀県人です。ダンスを教えるとともに、ダンス曲などの作曲も手がけ、仲間を率いてよきこいソーランの大会に出場したこともあります」

「ところで、30歳になった頃、『僕の人生で本当にしたいことは何だろうか』と考えて、やはり作家、という気持ちが込み上げてきました。ちょうどその頃、守山市埋蔵文化財センターが調査員を一人募集してい

ました。歴史に興味を持っていたので応募したところ、幸い採用していただいたので、ダンスをやめ、日中はセンターに行つて遺跡の調査、夕方から書くという生活を始めたのです。

僕が小学生の頃は『二平二太郎』、つまり、藤沢周平、司馬遼太郎、池波正太郎の各先生が大活躍されていた時期で、『永遠のあこがれ』のような存在でした。3人の作品が大好きで、二十歳までにエッセイも含めて全部読まさせていただきました。中学生の頃に藤沢先生が亡くなられ、『いつかこんな作品を書いてみたい』と思ったこともありましたが、まだ夢の世界でしたね。作家を意識したのは高校に入ってからで、卒業アルバムに『夢は小説家』と書きました。

ところで、考古もまったくの素人でしたが、現場で発掘する人々を指導し、まとめる仕事で、吉身北遺跡や下之郷遺跡、伊勢遺跡など守山市内のかなり著名な遺跡の調査を担当させてもらいました。日々、発見の連続で、例えば、竪穴住居の時代でも、かまどに分煙柱という煙を逃がす工夫をしているのです。僕の小説の中で、遺跡とか歴史とかの面で少し表現が違うな、と

感じられるとしたら、やはりその時の体験が反映していると思います」

■火消しシリーズでデビュー

—その埋蔵文化財センターをこの1月末、

退職されましたね。

そうなんです。勤め始めたのが2014年ですから、丸4年弱、お世話になりました。考古も面白かったのですが、執筆が忙しくなり、どうにも時間が取れなくなってきたのです。

調査員をしながら、暑い夏でもひたすら書き続け、翌2015年は、作品が仕上がる毎に、毎月のように応募しました。まったくの自我流で果たして通用するのかと不安でしたが、ラッキーにも『蹴れ、彦五郎』で伊豆文学賞最優秀賞、『狐の城』で九州さが大衆文学賞大賞・笹沢左保賞を受賞することができました。『蹴れ、彦五郎』は今川義元の息子で蹴鞠ばかりをしていたバカ殿様氏真の物語です。氏真は蹴鞠と剣術は達者だが、経営能力はまったくない人物です。彼を現代の視点で描いてみたらどうだろうか、がモチーフでした。蹴鞠は今だったらサッカーのことですが、才能が生かせない時代に早く生きた人にとって

才能とは何かと問いかけてみた作品です。

ところで、九州さが大衆文学賞の時の審査員の一人が北方謙三先生で、僕の作品を評価し、若さと将来性をすごく感じるとまで言ってくださったのです。そして賞を後援していた祥伝社の編集者を呼び『すぐ書かしてみることや』と声をかけ、そして僕に『どうや、やれるか』。

『はい』と返事をしてすぐに取りかかり、書き上げたのが江戸の火消しもの、羽州ぼろ鳶シリーズの第1作『火喰鳥』です。2016年の2月に着想を得て、9月に書き上げ、編集者と12月までかけて練り上げ、翌2017年3月に刊行となりました。だから、あくま



で僕のデビュー作は『火喰鳥』ですが、これも大恩人の北方先生がおられなかったら生まれていなかったと思います」

羽州ぼろ鳶シリーズは今年3月までの1年間に、第2巻『夜哭鳥』、第3巻『九紋龍』、第4巻『鬼煙管』と4巻まで上梓。時代小説界では最若手の「新人」だが、羽州ぼろ鳶シリーズとして好評で、4巻まで累計で16万部を突破した。5月には第5巻が出る。現在、違う作品3冊を並行して執筆中、と作家活動が軌道に乗ってきたため、埋蔵文化財センターに辞表を提出した。「せっかく目をかけてもらったのに申し訳ない」という気持ちがある。しかし、センター側からは「作家として頑張つて」と逆に背中を押されたという。

——JUNOで、今村さんにとって、

なぜ、時代小説だったのですか。

「もともと反骨のある人を書いてみたかったのです。権力には従わないが、弱い者は守ると。いろいろ調べてみて、江戸時代の庶民の中で火消しがすごく人気があったことに気付きました。『火事と喧嘩は江戸の華』と言われるように、江戸では大火が何度も起き



てその都度、悲惨な状態に陥るのですが、纏が舞い、派手な衣装の男たちがとび口を持つて躍動する火事場は一種のエンターテインメントの場だったのです。ところが、江戸の町で第1級の人気者だった火消しについては、史料はほとんど無く、言い伝えぐらいしか残っていないのが実情です。それでも、調べていくとどんどん面白くなり、火消しをテーマに選んで、デビュー作のぼろ鳶シリーズとなったのです」

■ 人生の機微を時代物に託す

「シリーズは、松永源吾という僕とほぼ同世代の人物が主人公です。泥くささ、かつこ悪さと男のロマンの両面を持ち、『漢』と言う



字で表現できるような、生きに感じた生き方を志す男です。かつこい賢い奥さんとくせ者揃いの男たちがいて、火消しの世界に新風を吹き込んでいくのです。火消しの男を中心に、社会を改革しようとしている老中田沼意次や池波先生が書かれた『鬼平』、火付盗賊改の長谷川平蔵のお父さんに当たる宣雄ら

をからませて描いています。今後、いろいろな展開を考えており、25巻のシリーズを目指しています」

「実は『藤岡屋日記』という江戸時代末期に書かれた本がありまして、それによると痴情のもつれとか子どもの虐待、金銭のもつれなど、現在、僕たちが抱えている問題がいっぱい出てきます。本質的な問題は今も昔もかわらないと思えるのですが、そうした人生の機微を書くには、時代小説の形を借りた方がもっとシンプルで自然ではないかと思われるのです。時代小説の方が、人

間の思いや道理をより素直に納得できる、それが時代小説の魅力だと思います」

——デビュー作の反響はどうですか、それと最後に、滋賀についての思いを話して下さい。

「羽州ぼろ鳶シリーズの羽州というのは、山形の新庄藩のことで、江戸詰の火消しを扱っています。そこで、山形県、とくに新庄市の人たちに喜ばれ、また、当時、加賀鳶が火消し界のスターだったことから、金沢市の人たちも好意的に読んでくれています。圧倒的に関東、東北で評判がいいと聞くと、関西出身の筆者としては少し複雑な気持ちです。別にご当地にこびる必要はないと思いますが、地域性を配慮するのは大事な要素ですね。江戸の物語ですが第1巻では、守山宿や彦根在住の時に身近に感じた荒神山を盛り込んでいます。これからも僕が生活している滋賀をもう少しアピールしたいと思います。」

10年前に滋賀県人になり、仕事の関係で転居を繰り返しましたが、どこも住みやすくて落ち着けるのがいいですね。琵琶湖がある環境がとても気に入っています。打ち合わせで上京し、戻ってくるとほっとします。滋賀の作家としてもっと頑張らねばといつも考えています」

